
最強のフィアンセ

レイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強のファイアンセ

【ZPDF】

Z0086C

【作者名】

レイズ

【あらすじ】

おれは南昂。今は高校生活も2年目に突入したばかりの16才だ。親から離れて暮らすおれの元にやつてきたのは自称ファイアンセを名乗る女の子？！・・・おれは知らないぞ。っていうか、おれの意思はないのか？！誰かと結ばれる？そんな予定はない！

序章（前書き）

新しく書くんで見てちょーひー。

新しくやりく新生活に慣れてまじつました。

「おかえり～」
「みなさんこんにちわ。」
「一つたずねたいのですが、ここはおれの部屋だよな？」
「・・・だれ？」
「変な人が話しかけてきました。ここは無視したいくらい。」
「おかえり～」
「・・・」
「えつと、警察、警察。」
「どこに電話するの？」
「警察」
「なんでなの？」
「不審人物がいるから」
「さて、110に連絡しないと。」
「昂ちゃんたら警察プレイがいいの？」
「何をしゃべっている？この変態が」
「ん？電話が繋がらない。」
「なにをした？」
「パパに頼んで昂ちゃんの電話使えなくしたの」
「なら強制連行だな」
「いや～ん。昂ちゃんのヒッチ」
「何を勘違いしてるんだ？！このバカ女は。」
「昂ちゃん、こつちは玄関だよ？」
「お前を交番まで連れて行くための玄関、いや、すばりしきゲートだ」
「勘違い娘には近づいたら危ないよな。」
「いやだ、いやだ！ベットがいいのーーー」
「つねに、お前は邪魔だ！」

「昂ちゃんが外がいいなら私、我慢する・・・」

涙流しながら何を考えてる？早くこの女を外に出さなきや。

「やつぱり、いや！ 外は恥ずかしいよ」

「十之は心」
聞くが お前に何を若えてる

「答えるよ。咲ちゃんとのスキンシップ……初めての体験」

「なんか聞こえた気がするんだが? 気のせいか?」

あー！ 『屏』あれば城を確保しなければ。

「…ん？」

なんかどこかで見たことがある顔なんだけど……。

「いいから、やが捲一ヶ月

「あー、悪い。・・・じゃなくて、お前、何でこいつに会ったんだ?」

「咲ちゃんとの約束を守るために決まっているよ~」

「あれは知らん！」

「本当に知らなーい

「ぐわ・・・、ハマーン」

「泣くな、泣くなよ。・・・恋は相変わらず泣き虫なんだな」

でも、約束ってなんだ？ おれは全くわからないぞ。 こいつのお得意の妄想の中での約束か？

な、殴るなよ。お前はバカみたいに力がつよ・・い・んだ・・か・

「呪わせん。呪わせん。一起死んで」

意識が途切れる寸前に聞いたのは、あいつの、泣きながらおれを求

めて叫ぶ声だった。

・・・ 続く

序章（後書き）

女たちの名前を募集！

ソーダン語で「だれご。自分の頭では考へれません・・・（苦笑）

恋愛になるの?--婚約ですか?--(前書き)

お父ちゃんって、何で元気なんだろ?。。。

恋愛になるの?否!婚約です!—!

「う・・ん・」

体が痛い。もう朝か。

しかし、何でおれは玄関で寝ているんだ?しかも床とキスしながら。

「もひ、昂ちゃんつたら」

昨日の記憶までフードバックしてやがった。幸せうに寝ている奴に初めて殺意が芽生えたぞ。

「恋!起きろ!」

おれを玄関で寝かせたくせに、こつまソファーで寝てやがる。

「うんにゃ?」

寝ぼけた顔でうつむ向くじやねえよ。・・・かわいじやねえか。それより、

「お前は何でこりで寝ていい。おれは玄関でお前に殴られて氣絶していただのこだ!」

「昂ちゃんを起こすのが疲れたから。あと30分は寝かせてえーこいつが寝始めたらマジめんどくさくなる。早く起こして、追い出して、学校に行かなきや。

「恋、起きてくれたらハグしてこいぞ。だから起きてくれないか?」「起きる!」

これは全然変わらないな。昔、おれが使つてた常套手段はいまだ健在だつたようだ。よく起きて行つてやつたなあ。・・・懐かしい。

「昂ちゃん、ハグしてくれんんじょ?」

そんな田をキラキラさせて言つなよ。

「わかった、わかった」

こいつって、こんなにいい番りしていたつか?マジこいつにおいだ。

「昂さん、どうかふつつかものですがよろしくお願ひします

「・・・は?」

抱きしめられんがら何を言つてんだ？！

「私、やっぱり昂ちゃんと結婚する！」

何ぬかしとんじゃ————話しが急過ぎるー

「それは許さんぞ……」

もう、考えたくありません。なんで、恋の父さんが居るんだよ？！
声だけがするんだけど。

「おじさん、何でそんなとこ……」

「お父さん？！見たくない……」

おれの部屋の窓にベツタリくつついでいる中年男、久しぶりに見た
な・・・。見たくはなかつたんだが。

ちなみにおれの部屋はマンションの6階なんだけどな。・・・です
がおじさんだ。娘のためならこんな変態行動も取れるんだから。

「ちょ、ちょっと？！やめてよ！恋ちゃん！—落ちたら痛いから

「うん、そうだよね だからもう墮ちて」

ハートが出そなぐらいの声だったな。しかも、社会的にも「おち
ろ」って言つてやがる。しかも必殺の鉄拳を窓に向かつて殴りうつと
してゐよ。ハハハ。・・・つて！

「恋！—窓は割るな！」

バリン！

ああ～、おじさんもろとも殴つちやつた。

「これで邪魔者は居なくなつたね

おれにはお前が邪魔だよ・・・。

「大丈夫ですか？」

「ふん！大丈夫に決まってるじゃないか！！恋ちゃんを残して死ねるもんか！」

1時間もしないうちに生きて返ってきたよ。すげえよな？！でも、でも！さすがの親バカです。おれは感無量ですよ。

「パパには許してもらつたのに、なのに！なんで？！お父さんが来るの？！？」

恋つていつからおれの親父を「パパ」って呼ぶよつになつたんだろう。つてか！

本当なのかよ・・・親父。おれに安らぎをくれないのか？許しなんか本人の許可なく出すなよ！

「バカ親父が――――！」

思わず叫びたくなるだらうが！

ピンポーン、ピン、ピン、ピンポーン

何だ、この呼び鈴は。壊れたのか？

「はいはい。今行きます」

開けるのは間違つた選択肢だつたのかもしれない。あとで、おれは思つてしまつ。

「やつほー」

開けて出てきたのは、もちろん、

「あ、パパ」

「親父・・・」

「き、貴様！」

おれの親父だつた。間違えました。・・・どうかのおじさんのライバルのキモイ男だつた。

「何で親父がここに来たんだ？」

「それはね、恋ちゃんと昂の婚約発表のためだよ」
「はあ？！何でそんなことになつたんだよ？！」

おれは全く知らんぞ！誰が決めたんだ！！

「もちろん、僕だよ」

そりやわかってる・・・。

「いいから俺の質問に答える!」

「怖いなー。わかりましたよーだ」

「パパ、かわいいね」

「ありがとう恋ちゃん」

おじさん、あなたの」と、誰も無関心ですよ・・・哀れ!

「さあ、話せ!」

「それはね、僕がここ)の変態君に賭けで勝つたからんですよ」

「話しがわからん」

「だからね、僕と変態くんが酒飲み対決で勝ったの。それで、やっぱり勝者には何かないといけないでしょ?だから僕は会社を。この変態君は恋ちゃんを。お互いが一番欲しいものを賭けに賭けたんだよ」

ふむふむ。

「だが、何でおれと恋が結婚しなきゃいけないんだ?」

「恋ちゃんのお願いだつたから。恋ちゃんが昂と結婚したいんだつて」

元凶は恋だったのか。

「なあ、おれしたく「したくないなんて言つたら、あそこ)に連れて帰るよ?」・・・

だけど、

「結婚つて好きなもの同士がするんだろ?だからおれが、恋を好きにならなきゃ意味ないんじゃないか?」

「確かにねえ~」

「そういうわけで、猶予がほしい!」

「それじゃあ3年生になるまでね。それで好きにならなきゃ結婚しないでいいよ。だから恋ちゃんと話してんしへ~ムカつくしゃべり方だな。だけど、好きにならなきゃいいんだ。それで、結婚はまぬがれる!」

「だけど、住む場所は恋ちゃんもここだからね

「「はい？」」

「おじさん、まだ居たんですね。しかもハモツちやんこましたよ。

「「それはダメだ！」」

「またハモツちやんこましたよ。おじさん。

「君の恋ちやんがしたいって言つてるんだよ～？断つたら即結婚…」

「昂ちやん、お父さん、お願ひ…」

「はあ～、わかつたよ」

「恋ちやんの頼みならじょうがないよ。うんうん」

「おじさんの性格つて恋絡みだとかわいいよな。

「じゃあ僕等は帰るから。あとは2人で」」ゆつくつ

「恋ちやんに何かしたら殺しつくるからな…」

「おじさんには逆らいたくないですよ。

「じゃあ昂ちやん、よろしくね」

「あ、ああ…」

「ひつて、婚約未満の生活？がはじまた。

続く・・・

恋愛になるの~!~婚約ですか~!~（後輩）

次は学校に行いつよ。

恋ひちゃんの暴走は止まつません~!

学校つて疲れます b・y 島（前書き）

更新遅れています（汗）

1週間に1回のペースで書くようにがんばります

学校つて疲れます b`y昂

本日は晴天ナリ。昨日までのおれとは違ひ予感がする。朝起きて、一番最初に思つてしまつ。昨日が大変だったからな。

Replay

「恋ちゃん！ いつでも我が家に帰つてきていいんだからね」涙を流しながら言つのは、変態親父^父、のおじちゃん。

「恋ちゃん、絶対に帰つたらダメだよ？ 変態なお父さんがいるんだから」

「はー！ わかりました」

満面の笑みで返事してゐる・・・。おじさんが泣いてるじゃないか。「親父、おじさん、帰つてもられないでしょ？ つか？ 学校に行きたいんだけど・・・」

「さつきは帰るみたいな発言したけど、帰りたくない」
マジうざつーダメな大人のいい見本ですな。

「私もパパと居たいなー。昂ちゃん、いいでしょ？」

上目遣いはやめなさい。おれの心臓がうるさくなるでしょ？ が！

「はあー。今日だけにしてくれよ？ ジゃないと母さん呼ぶぞ？」

「大丈夫！ 加奈子さんの許可はもらつて來てるんだから 今日だけだけど・・・」

親父、やつぱり母さんが怖いんだな。

我が家勢力図的に、母さん>妹>親父>犬>おれ？！ ちょっと？！

！おれが一番下なのかよ？！

「おい貴様！ お願いだから恋ちゃんを取らないでくれー」

「ちょっとおじさん、泣かないでくださいよ」

「だつて、だつて・・・恋ちゃん」

「のよひな」とが昨日あった。マジかかった。おかげで学校に行けなかつたし。

今日は絶対に行くけどね。わて、我が家のお姫様を起しねければ、

「恋、起きる」

「つーん・・・」

またかよ・・・。こい加減起きしねだせこよ。

「恋、起きてくれたらハグしてやらなここともなこぞ?」

「ホント?・・・」

「はー、おはよひ」

「昂ちやん、昂ちやん、ハグプリーズ!・・・

「やなこつた」

朝つぱらから恥ずかしいだらうが!・

「つーーー!・・・」

すねるなよ。

「おれは学校に行くからおとなしく留守番してねー。」

「つょうかーー」

めんじくわやうな声を出すなあ。

「じゃあ行つてきまゆ」

「・・・こつてらつしゃこ」

まだ怒りこちがる。

「昂べー、おはよひ」

「お兄ちやー、おはよひ」

マンシ^ン入出た瞬間に、見知らぬ人AとBが現れた。

昂の「マンデ

たたか「

あこわつする

ほかくする

むしする

にげる

もちりんにげるだ。そうと決まれば全力疾走！

「お兄ちゃん、何で逃げるの？」

「それは、わからないな」

「わからずに逃げるの？」

「うん」

あいかわらず威圧感出すよな。

「嘘です。」)めんなさい。舞子ちゃんのプレッシャーはおれには凶器だよ」

「そうなの？ それは」)めんねえ～」

怖い怖い。かばんで殴りつと構えないで。

「舞子、そろそろやめなさい」

「わかつたよ、・・・殴りたかつたな」

最期が聞きづらかつたが、殺意をもたれたのか？

「あらためて、おはよ。北島姉妹」

「おはよ」

「昨日はすまなかつたな。朝、待つてくれたんだろ？」

「うん。お姉ちゃんなんかものすゞく心配してたんだからー。」

「ちょっとー舞子ー！」

「桜、すまなかつた」

「いいよ。だけどどうして休んだの？」

「それは、親父が来てたんだ」

嘘は言つてない。

「ケータイに電話したのに出なかつたし」

「それはバタバタしてたんだ」

恋が窓を割つたり、おじさんガボロボロになつたりで。これも嘘は言つてない。

「そつか。カゼとかじやなくて良かつた」

「心配かけて」)めん」

「いいよ。それより早く学校に行！」

「そうだな」

学校に着くと、舞子ちゃんとは校舎に入る前で放課後までお別れ。ちなみに、桜とはまた同じクラスになったので1日中一緒にわける。そういえば、あいつは来てるんだろうか？ 我が親友、我が悪友、まあ変態でいいか。

「やつぱり居たか。沼田伝助」
ぬまたでんすけ

「久しぶりではないか！ 昂よ。昨日はなぜ休んだのだ？」

「悪い、昨日はちょっと用事でな」

「女か？ お前の体からは女の匂いがするぞ！ 我らのく寂しい男同盟へはどうなったのだ？！」

「そんな同盟は組んでない！」

つてかこいつの変態嗅覚はすげえな。ある意味感心だ。なんか視線が、痛いんですけど。

「桜さん・・・」

そんな猛獸ですら怖がる目はやめて。

「で、女とイチャイチャしてたのか？！」

「そんな興奮して言つなー！ 昨日は親父が家に来ただけだ。ただそれだけ」

「そうか。それはつまらんな」

「お前は何を期待してたんだ？」

「伝助は秘密がいっぱいなのよー！」

「くたばれ！」

おれのパンチを余裕でよけやがった。腹立つなー！

「そういえば、今日転校生が来るらしいぞ」

「本当か？」

「本当だ。昨日先生が言つていたからな。ちなみに女らしいぞ」

・・・嫌な予感。ベタな展開はお断りだぞ。

「と、言うわけだ。聞いていたか？」

「すまん、聞いてなかつた

「だからーお前の席の横になるから仲良くなれるなよー同盟を忘れてはーかーからねー！」

「はいせい」

まさか、な。あいつは来ないだろ。

「みんな、席につけ。今日は昨日話したよ。男ども！かわいいからって襲うなよ！」

あんた、一応教師だろうが。発言に気をつけろよ。

「まあ
うー」

似たような声だけど、幻聴だ！絶対に……

だから、何も見たくない！聞きたくない！！

「自己紹介を簡潔にしてくれ。3サイズも忘れずに」
あんたクビにしたいよ。

「はじめまして、西山恋^{にしやま}つて言います。3サイズはひとつで～す。教えてほしかつたりしても、教えません。だって、嫌な予感つてかなり当たるんだよな。」

「んでしまいました。

「・・・昂くん、・・・」

せりせり当たるだらう?

桜と男子に殺されそうな勢いじゃん！ 桜なんか、『』によ『』によと危

「「「南！お前は殺だ！！！」」

やばいから。

「伝助、おれは逃げるから」

「後でじっくりと痛めつけてやる」

怖いからやめて。

こつして、クラスの男子（+桜）との鬼ごっこが始まってしまった。

・・・ 続く

学校つて疲れます b や島（後書き）

次回は、パート2になります。

おれは鈍感じでや（前書き）

新たなキャラが出現！名付け親求めます。

おれは鈍感“りじ”じでゅ

「いたぞーー！」

「ちっ、見つかったか！他の奴を呼ぶ前に倒す！
「くらえ！」

おれの「んしんの一撃は、見事に命中した。

昂は、レベルが上がった。つてなんやねん！

「こつまで逃げればいいのかな？」

思わず独り言をつぶやいてしまつよな。それもこれも、誰のせいだ
？おれは被害者だろ？が！

「昂ちゃん見~つけた」

今回の原因め・・・。

「昂ちゃん、何で逃げてるの？」

「お前、わかつてないのか？」

「・・・全くわからないよ~。教えて」

お前つて、本当はねらつてやつてんじやないのか？

その上田遣いと、服からの胸が見えそつた感じがおれの怒りをつづま
つていくじやねえかよ。

おれも男だからね。

「昂ちゃん、教えてよ~」

「自分で考えろよ」

「わかんないよ~」

「こいつと話してるヒマはないな。

「じゃあおれは行くから」

「嫌だ~。私も一緒に行く！」

わがまま言つんじやあつませんーお母さんば許しませんよーー！

「それなら私も行こうかな？」

「？！・・・・・桜か。どうしてここに？..」

「だつて、一緒に行きたいから」

おれつて、桜にも追いかけられてるんじゃなかつたかな？

「それに、嘘をついた制裁つてのがあるのよー」

「嘘はついてません！ 桜さん、そのモノは怖いんですけどーー。モツプでも昔剣道やつてたらしき人には持たせてはダメだろ？ 空氣切る音が聞こえるほどすげー振りなんですけど。

「問答無用！」

「くつ！ 逃げるしかない！」

「昂くん、逃がさないからー！」

桜がマジにええ。おれに逃げれるのか？ いや、逃げれはしないだろう。

「やあ！」

「ハツ！ 秘儀、白刃取り！！」

これで身動きは取れないはずだ。

「昂ちゃんかっこいいー！」

照れるじゃないか。恋、氣が向けばハグしてやるぞ。

「本当に？ー！」

「あれ？ 声に出てた？」

「ぱつちりと聞こえたよー。ハグをちゃんとしてね」

「ば、バカ！ 今そんなこと言うなー！」

言わんこつちやない。モツプの剣士が復活しただろ？ が！ でも今度は涙いつぱい皿に浮かばせて、もしかして泣かしちゃつた？

「昂くんの浮氣者！ー！」

「なぜに？ー！」

「私が、私がー昂くんのこと大好きなのにーーー。」

「！ー！」

「私のほうが昂ちゃんのこと大好きなのーーー。」

「恋、お前は静かにしてろ。桜、今の友達としてだよな？」

「この鈍感！ いい加減に気付いてよーーー！」

つてことは友達としてじゃなく、だよな？

「「めん。今まで気付かなくて。」

「 「 「 南を発見！ ！」 」 」

こんな時に来るなよ。

君達がもう少し空氣を読んでくれたらおれはうれしいな。

「 桜、ひとまことに話はあとで」

「 「 「 逃がすな！ 追え！ 追うんだ！ ！」 」 」

「 「 「 ラジャー ！」 」 」

「 ふう、やつと逃げれた」

もうお昼か。長い間追いかけてたんだな。屋上はおれともう1人しか来れないから大丈夫だな。

それより、桜がおれのことを好きだったなんて、全く気付かなかつた。

「 あら、南くんじゃない」

「 あつ、先輩。こんにちは」

「 こんにちは。今日学校がうつるさかつたのは君のせいね？」

「 ・・・ そうです。すいません」

やつぱりうるさかつたんだ。全校生徒の諸君、すいませんでした！

「 それで、何が原因で騒いでるの？」

「 それは・・・・・・」

こと細かく先輩に説明しなくちゃ、じゃないと先輩がおれを奴らに売りそそうだし・・・。

「 それは大変だね。生徒会長の権限でどうにかしてあげようか？」

「 お願いしたいんですけど、その後の先輩が怖いんですけど・・・」

以前に先輩に何かをお願いしたら闘犬を見に、高知までは行つたんだよな。

その後は先輩がおれを無理矢理闘犬と戦わせるんだから、あれは怖かつた。

「 今回は大丈夫よ！ 南くんとデートしたいだけだから」

「 まあそれなら・・・ って、デート？ ！」

「了解してくれたんだ あとは任せとおいて」

「ちょ、ちょっと、先輩！それは、」

もういないじゃん！先輩とデートなんかしてみる、クラスの奴に見つかり、今回と同じことが起こる。そしてまた男子が暴走。エンドレスに続くじゃないか！先輩、あなたは美人なんだから、この学校のプリンセスなんだから、デートだけはやめてください。おれが死にます。

「南くん。もう教室に戻つても大丈夫だよ」

「1時間もしないうちに・・・。どうやつたんですか？」

「うーん、内緒」

また先輩の謎が増えた。

「じゃあ明日のデートを楽しみにしておくから。ちやんと家まで迎えに来てね」

「先輩待つてくださいー。」

もういらないじゃん。

あいかわらずおれにNOを言わせてくれないんだから。たまには人の言うことを聞いてほしい。

「さて、先輩がたぶんなんとかしてくれるはずだから、教室に戻るか」

「そうだねー」

お前は忍者か？

「いつから居た？」

「最初から居たよー。昂ちゃん、気付いてなかつたの？」

「恋、お前より濃いキャラが居たせいでわからなかつたよ
先輩、恐るべし！」

「桜ちゃんも居るよー」

大丈夫。怖くない、怖くない。

「昂くん、明日デートなんだ？楽しそうだねー。私も行きたいなー」

「昂ちゃん、私も、私も」

「一人そろつてプレッシャーかけるなよ。

恋は鉄拳で、桜はモップで。だからおれは、

「は、はい・・・」

言ひしきないじやん！

「「やつたー」」

おれはやつたーって喜べんわ！

反論できないおれはヘタレか？

「もちろん。お前がヘタレだ。」このことはスクープだな

「伝助、・・・居たのか？」

「当たり前だ。僕はいつでもお前をストーキングしているからな」

「きもつ」

「キモイね～」

「沼田くん、死んだら？」

「三者三様の答えに伝助は？！」

「鬼・・・」

泣いちやつた。今日は涙テーか？

伝助だから放つておー」。

「それより昂ちゃん、教室に戻ろうよ

「そうだな」

おれと恋と桜が屋上から出ると、

「置いていかないでよーーー！」

だつて。キモイな。

だつて。キモイな。

そうだ、そうだ。教室に入つてビックリしたことがあるんだ。

男子が全員スキンヘッドだつた。なんですか？って聞いたら、みんな

口をそろえて言つてた。

「悪魔が、悪魔が来たーーーー！」

と、言つておりました。

先輩がどうやったのかは現段階では不明である。

・・・ 続く

朝起きてのドッキリ作戦？（前書き）

更新遅れてすいませんでした。今回は短めです。
プライベートが落ち着いたので、なるべく早く更新したいと思いま
す。これからも、ご支援お願いします。

朝起きたのアタリ作戦？

「ヒルヒルの日がきたのか」

今日は土曜日。普通の学生には嬉しそうとかもしれないが、おれにはきてほしくなかった。

「こいつ逃げるか？」

「……逃げれない。

「なんで体が動かない？」

首を起こして見たおれの体には、縄がしっかりと巻きついてあります

けど……。

「なんでこいつなんだ？！」

「恋ー恋ー！」

「ふあーーい」

「何でそこにいるんだよー！」

恋の声がしたのはおれのベッドの横から。言つなれば、おれの部屋の床から。ついつむのが疲れてきたよ。

「夜中に起きちゃって、昂ちゃんの寝顔を一目見よつと入つたんだけど、昂ちゃんの寝顔がかわいいからそのまま私も寝ちゃつたの

」

「そうか。だが、この状況はなんだー！」

「昂ちゃん、もしかしてマ～？」

「違う！だから、お前がしたんじゃないのか？ー！」

この状態はけつこいつらにんだから。

「私じゃないよー。パパがやつたんだつー

「なんだつて？」

「ここの紙に書いてあるよー

『「君はすでに僕のものをつぶせつぶを志ちやんこ並んで、縄を解いてあげようかな』

ふ、ふざけんじやねえ！……あのヒマ親父！今度会つたら太平洋に沈

めてやる…

・・・ん？まだ続きがあるみたいだな。

『加奈子さんといじめられたから、お前に天誅！いや、ハツドたりだ！

b yパパ』

ハツドたりすんなよ…母さん、いつそのこと埋めてください。おれからのお願いです。

「なあ、縄を解いてくれないか？」

「イヤ！昂ちゃんの縄られてる姿がもつと見たいの～」

変な奴だな～。

こいつの頭の9割はバカだな。おれの中で決定だ。おなじみの手を使つしかないのか？

「昂くん！なんで縛られてるの…？」

お、桜。助けに来てくれたのか？たぶん桜は、デートを見に行くためになんだな。

「桜～。縄を解いてくれ～」

「えつ？何で？私が昂くんの縄られてる姿を見るのはいけないの？ダメなの？恋ちゃんは見ているのに…。昂くんつて白状だよね…」

・・

「やうだよ～」

白状はあんたらだろ？

もういいよ。おれが自分でなんとかするからさ…。

「村中将大！居るんだろ？出で来い」

「なんで！」やううか？

「縄を解いてくれ」

「了解致した」

村中は、おれの付き添いの忍者で、昔もよく助けてもらつたな…。

・。こんな風に。

いい奴なんだけど、

「昂殿、拙者に絡まつたで！」ざるる

「あっがとう。そのおかげで、おれは自由だよ」

「助けてください」

ドジなんだよな。

「はいはい」

村中の縛を解いてしる途中に嫌な視線を感じるんだよな。

「なんだよ？」

「おおきん（ぐん）にじないよ」 村井やん（たん）

「な、なんで」「やるか?」

さすがの忍者もひびるよな。この2人、怖いもん

「なんで昂ちゃんの繩を解いたの？・・・村中さん？」

「それは、主君の命であり申したから・・・」

恋せりん

重にないが、」

廿四、元和二年

「昂殿、
助けてください」

「無理」

「
昂殿」

御機嫌伺ひ。おまけに、お詫びの言葉も漏れ。

卷之二十一

•
•
•
続
く

朝起きたの？ キャリ作戦？（後書き）

今日は「トーント編に続く前書きみたいな感じです。

キャラクターの要望がありましたので、登場させてみました。皆様
も、お前の希望があればどんどん書つてくれだせ。

ホートに行くのも一苦労をわかつてくれますか？（前書き）

長い間ほつたらかしにしてしまいました。

1週間に1話は更新していくつもりなんですよ。しかしよろしくお願いします。

デートに行くのも一苦労をわかつてくれますか？

外に出てみると、雲ひとつ見当たらぬ晴れだ。周りを見るとここやかな家族連れなどがたくさんいる。

だけど、おれの心は曇り、大雨だな。原因なんてわかりきつてゐるじゃないか・・・。

両隣にいる美少女だよ。なんで付いて来るんだか。

「恋、いい加減離れてくれないか？あと、桜。怖い視線でおれを見るな」

「いやだよ～」

「怖いって誰のこと？」

恋は腕にまとわり付いて歩くことを困難にさせるし、桜は鋭い視線でいじめるんだからちぢこまつて動けないんです。

「・・・もういい。だけど、東先輩には迷惑かけるなよ」とぼけた顔を2人ともしてやがる。わかつてゐるのかよ。

「2人とも、今日何をするのかわかつてゐるのか？」

「「デートでしょ？私との」」

勘違いしてやがる。

「違う！今日は、先輩に助けてもらつたお礼だ！わかつたか？！」

「昂ちゃん、私がいながら浮氣をもうするのね？！」

ちよつと待て。言しながら電柱をミシミシ音をさせながら潰していく！

「な！～

だけど言わなきゃ。・・・怖くないぞ、怖くない。

「誰がだ！浮氣の前に付き合つても婚約も何にもしてないだろ？が

！～！」

「そうですよ。私と付き合つんだから」

「桜、流れでもちやくちや言わないでください」

「・・・昂君は私がイヤなんだ・・・。嫌いなんだ。」

あの・・・、桜さん、泣きながらその服のそでから光つてゐるナイ

フを隠していただけないでしょ うか？

「2人とも！ 今日は勘弁してくれ！！」

土下座しながら頼んだけど、回りの目が痛い。

奥さん、 そんな甲斐性なしのヘタレがいるわ、 みたいな目を向けてな
いで。

「いつか何でも言つこと聞くからや」

「「本当？」！」

勢いがすごいな。

「本當だから今日は大人しくしといてくれ」

「桜ちゃん、 これは引き下がるしかないよ」

「そうですね」

2人とも怖いくらいの笑顔だな。 しかし、 ドス黒い笑顔だけ。

「じゃ、 じゃあ行つてくるから」

「「いつてらつしゃい」！」

ようやく待ち合わせの駅前に行ける。 やつぱり休日なだけあって、
人が多いな。

駅前でよく待ち合わせをするカップルがよく利用する噴水前は非常
に多い。

この中に天使の翼のようなものがある噴水は、 おれの親父が10
年前にこの市に寄贈したらしきけど、 いらないだろ。

親父の考えはよくわからん。 だけど、 こうやって利用されているん
だからいいんだろうな。

「南くん、 おはよう」

「あつ、 先輩。 おはようございます」

後ろから声をかけられたから一瞬驚いたけど、 まだ驚きが足らなか
つたみたいだな。

いつも制服しか見たことないけど、 今日の先輩は綺麗・・・？

「つて、これカエルくんじゃないか！！」

「ナイスなツツ「ミミだね」

カエルからひょこつと顔を出すのは我が高校の無敵の生徒会長だ。
「先輩、驚きましたよ。いきなり先輩の顔がカエルくんになつたと
思いましたから」

「それが狙いだつたのだよ。ところであの2人はいないのかい？」
「2人とも大人しくさせましたよ。先輩が一応デートだつて言つも
んですから」

「君にしてはいい判断だつたね」

と他愛無い会話をしながら駅前の噴水を歩いて、先輩が行きたがつ
ていたバッティングセンター前に来た。

「今日は田口のストレスを解消しよづじやないか」
と先輩は黒く長い髪を翻しながらこちらに振り向いた。

「そうですね」

「負けたほうは、罰ゲームだからね」

「罰ゲームの内容は？」

「わたしが勝つたら、今日の昼飯を奢るよ。だけど、南くんが負
けたら、・・・・」

「・・・・マジですか？」

「大マジだよ」

あまり気が向かないけど、そんなことは気にしないでいよう。
これは負けられない戦いになつてしまつた。

伝助の不幸。おれの憂鬱

バッティングセンターでの勝負はものの見事に負けました。20球のうちどれだけ打てるかを競った結果は、先輩が19球、おれが10球。

「ストレス発散できたね～」

というのは19球のうち、18球ホームランを出した先輩。

「そうですね。あの～、あれやらなきやいけないですか？」

「もちろん」

やりたくねえー！

「やりたくないでもやるんだよ?..」

「顔にてました?」

「すごくでてるよ」

そりやそりでしょー。あれをやりたいと思うのがビリビリるつていうんだよ?！・・・・・、いたな。変態という名のクラスメートが。あれを変態がやつた時点で先輩に三途の川送りになると思うが。

「それじゃおなかも空いたし、『飯を食べに行こうか』

「・・・・・そうですね」

「ふて腐れない、ふて腐れない。明日の学校で楽しみにしどくから」「楽しみにしないでください」

真剣にお願いします。全校生徒を、学校を敵にまわしたくないんで。

「じゃあ」飯は近場にあるファミレスでいいかな?」

「はい・・・・」

本当に憂鬱だ。明日、学校休校にならないかな?なるわけないよな。

「いらっしゃいませ。何名様ですか?」

「・・・・・2人です」

バッティングセンターから15分ほど歩いたところにある「アリーナ

スに来たそうそう厄介事が増えた。

なんで？なんで変態が店員なんだよ？！

「昂よ、赤い糸つてあるもんだな」

「もし！お前との間にそんなものがあるとこつなら即刻、断ち切つてやる」

「照れるなよ」

嫌がつてこるのが本当にわからないのか？変態は変態KYOに進化してやがる。

「先輩、この店はやめませんか？」

「昂！なんで生徒会長と一緒にいるんだ？！」

「別にいいんじゃない」

「先輩が言うなら別にいいですが」

「おい！無視か？！無視するのか？！？」

「ひるとい変態だな。

「おい変態。これから語尾にドMですかりつてつけて話したり会話してやる！」

「なんでそんな上から田線？！」

「今日から1週間ずっととしてるよ？」

「拒否権なし？！そんなむちゅくちゅなー！」

「それができたらお前の好きなアレをやる！」

「やらせていただきます。ドMですから」

「アレってなんなの？」

「秘密です」

アレがからむと扱いやすいんだから。単純でバカで変態なんだから扱いやすいの当たり前か。

「じゃあ席に案内してくれないかな？」

ちょっと先輩が不機嫌なんですけど。今まで会話に入れてなかつたからか？

「わかりました。ドMですから」

気持ち悪いやつだな。

「先輩、こんな店員じゃなく違う店員は対応してもらいたいんです」

「 そ う だ ね 」

「ちょっと待て！僕は無視か！無視がいいと思っているのか？！・・・ドMですから！」

と、騒いでるうちに変態は店長らしき人物に奥に連れて行かれた。たまに、奥の方から「ドMですかからー」と聞こえるのは完全に無視にしよう。

「先輩、なんにします？」

「食べれるんですか？」

先輩が常人じや考へれない量を、吐き氣がするぐらいの量だぞ。軽

ぐ8人前ぐらには間違なく頼もうとしてる

「これくらいには普通に食べられるよ。お金なら心配ないから。だから、あの変態君にお金は払わすつもりだから」

食べる量と、お金の面で。言葉が出ないな・・・。伝助、いや変態よ。お前のバイト代はすぐになくなる。財布はもう時期冬を迎える

だらうよ

卷之三

なんか聞こえたな。
気にしないでいよう。

「今日は付き合って貰ってありがとうございました」「ううん

「いえ、おれも楽しかったですか。」*うひひひそあつがとつぱりぞこ*
ます。東先輩」

「下の名前で今日くらいは呼んで欲しかったな」

先輩の名前ってなんだっけ？たしか、陽菜だったかな？

「先輩の名前って陽菜であつてましたか？」

「そうだよ」

「じゃあ陽菜先輩。今日はありがとうございました」

「それでよしとするか」

「?なにがですか？」

「こっちの話だから気にしないで」

よくわからんな。

「じゃあ南くん、また明日学校でね」

「はい。陽菜先輩」

先輩は駅に向かって歩いて行きながら「ひきを振り向き、何度も手を振つてた。

余談だが、先輩が食べた金額はちゃんと伝助に払わせた。諭吉さんが2人ほど飛んでつた金額はおれが払うことにならなくて良かつた。さらに余談だが、帰つてみると恋がニヤケながらおれのベットで「口^ノ口^ノ転がつていた。

何をニヤケているのか知りたくない。絶対に……。聞いたら最後だと思うからな。

アブルはいつも周りから～前編～

朝、それは人によつては新鮮な気持ちになれるものであつたり、憂鬱なものである。今のおれの心境は間違いなく後者だけ。ついでに、おれの場合は問題も発生するわけだからな。

一番目の問題は、朝起きるとベットの中には不法侵入者が1名寝転んでいること。おれは確か、寝る前に部屋の鍵を閉めたはずだ。だが、そいつはおれのベッドで気持ち良さうに寝ていてる。時折、よだれを垂らしているが。

「おい、恋。起きりよ

「昂ちゃん、・・・そんなことダメだよ・・・。ジユル

リ

どんな夢を見てやがるんだ?よだれを垂らして、おれが関係する。わかるはずない!この2つのキーワードでわかるほどおれは頭がよくないぞ!

「恋! 遅刻するわ

「こいつ、遅刻したいのか?

「恋、今日はおれも知らないぞ。いいな?」

完全に爆睡モードになつてやがる。

恋が起きたのは、その出来事から約10分後、26分後。

起きておれに怒つてきやがつた。

「なんで起こしてくれないの?！」

「近所さんに聞こえるほどの声でつぶやか———！」

「起こしたのに起きないお前が悪い」

「ハグとかしてくれたらすぐに起きるの?——！」

「しおりちゃんハグとかできるか?——！」

おれも大きな声になつちました。

「昂ちゃんのイジワル——！」

すねやがつた。まあ、そう言いながらでも準備してゐるからいいかな。

「恋、準備できたら行くぞ」

「はあ～～～い」

完全にすねたな。

「今日は恋の好きなもの作つてやるから機嫌なおせよ」

「それだけじゃヤダ～～」

駄々っ子に進化してないですか？

「じゃあ何をしてほしいんだ?」

「ハグ！！」

「はいはい」

おれつて甘いよな・・・・・。ハグしてから2分後に家を出れた。

「 」 」 」 」 」 」 」

「ああ、おはよう！」

卷之三

「おおきな夢かの轟く声のビーム

「つかひ井すけ」

「長治縣10月23日之開市情形」

卷之三

「お門のね い フラワーリゾート

舞が上へ聞かないでくれ
アノの事情で奴だから

田村 岩女 人にはアタシで もう がん

卷之三

ガシツ

「尼采」

「アーニー、おまえの隣に座る女は、おまえの娘だ。」

やけに2人が怖いのはおれだけじゃないよな?だつて野良犬なんかもさつきまでゴミを漁つてたのに、今は遠い彼方にいるぐらいだ。

野生の本能で逃げたんだろうな。

「き、今日は早く学校に行きたいな～っと思いまして」

「「なんでかな??」」

2人が怖いからだなんて言えるかよ?―言える奴がいたら出て来い!!

「2人とも怖いよ」

ここにいらっしゃいましたね。

北島姉妹が恋のほうを睨んで、恋が泣きそうだし。

「恋、学校まで逃げるぞ!」

「わ、わかったよ～!」

「「待て――――!――!」」

これが2番目の問題。

不用意な発言は気をつけさせないと。

とにかくダッシュで、学校の校門前まで着いた。

おれが苦しいのに、隣の恋はケロッとしてやがる。おれの体力は人並みにはあるはずなんだけどな。

「疲れたね～」

お前が言つても説得力に欠ける。

「「待て――――!」」

「・・・はあ、はあ・・・・・恋、教室に行こう。今すぐ行こう

「・・・・・そうだね」

北島姉妹の追撃は教室に入つた後も続いたよ。結果?・桜と舞ちゃんにボコボコにされましたよ。教室にいた男子からの攻撃もなかつたような、あつたような。

遅刻はしなかつたけど、痛いよ・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086c/>

最強のフィアンセ

2010年10月10日18時56分発行